

<シン・エヴァンゲリオン>

アニメ版と劇場版ではストーリーが異なるエヴァ。聖書関連の言葉を使って謎めかせ、多くのコアなファンたちの議論の的となり、従来のアニメ観を全く変えてしまった異色作。劇場版では序、破、急=Qと雅楽の真似をした意味ありげな名称。そして最後の作品は「シン」。

長い年月を掛けた総まとめ、となるはずだ。しかし、Qのあと、コアなファンたちから非難され、監督は精神を病むことに。NHKのドキュメンタリーで監督自身が語っていたことは、台本を作るとつまらなくなるから作らない、と。つまり、聖書から言葉やアイデアは借りたものの、それが聖書的な内容を暗示するものではない上に、筋書きを最初から考えていないから、壮大な物語の着地点を見ていないから、監督自身收拾が付かなくなり、精神崩壊してしまったのだ。まあ、最初から着地点が見えているようなものなど、監督にとってはやる意味は無いのだろうが。さて今回、謎として例えば以下のような未解決の部分は解決されるのだろうか？

・使徒がアダムを求めてインパクト？第2使徒以外の使徒は、アダムから生まれたのだから、本来はリリスと接触することによってインパクトが発生するのでは？そうすると、リリスだと分かっている使徒はNERVの基地を襲撃するわけ？いや、ゲンドウの右手にアダムの骸があるのを知っていて、奪還するために襲撃？

・エヴァも初号機以外、アダムをプロトタイプとしているのに、リリスの体液であるLCLが入っていて、インパクトしないのは何故？リリスのコアではないから？

・綾波の魂はリリスの魂のハズだが、人造人間たる綾波のコピーが幾つもあるのは、リリスの魂を分割している？

・渚カヲルはアダム、綾波はリリスの魂だが、両者が接近しても、インパクトは発生しないのか？アダムは「生命の実」で「知恵の実」が無いのに、渚カヲルは何故、知恵を持った人類タイプのアンドロイドなのか？

・ネブカドネザルの鍵とは何なのか？

確かに、「ネブカドネザルの鍵」については、ゲンドウが人間性を捨ててしまったキーとなるものだと今回判明したものの、どのように使い、そもそもどんなものなのか実態は不明のまま。つまり、謎としては解決されていない。また、前作までの未解決部分も解決されていない。

それどころか、頭を銃で打たれて脳みそが砕け散ったゲンドウが不死身という不可解さ。ネブカドネザルの鍵や神殺しが効いているのか？

マリはユイと同世代のハズなのに、若返ってエヴァに搭乗？

オッサンのゲンドウが、何故、14歳の少年少女しか乗れないエヴァに乗れる？

肉体という物質を捨て去った後に魂が物質化？

こういった数々の新たな疑問も出てきて、やはり「謎の解決」などは監督の頭に無かったようだ。だから、この作品に於いて、もはや「謎解き」する意味は無い。

そういう点では、同じ長い年月を掛けた大作映画スター・ウォーズとは比較にもならない、酷い駄作だ！待ちに待ったファンに対しても、ある種の無責任。そしてパンフレットはほぼ完売状態で、いつ入荷するのかは分からない、とは映画館の販売員の談。ロングランするなら、高額転売を阻止するためにも、バンバン印刷して売るべきだと思うが、そういう意味でも、監督は無責任なのだ。

そもそもエヴァは、死海文書や聖書中の言葉やアイデアを借りてきただけで、その内容と直接結びつくものではなく、しかも着地点を決めた台本が無いから、謎解きの解を求めること自体がナンセンスだと言うこと。しかし、これら意味深な用語のせいでコアなファンたちが引きずり込まれ、ああだこうだと諸々のエヴァ論がずっと展開され続けてきたのだ。

従って、数々の新たな疑問の「謎解き」という無意味なことはやらず、感想を述べるに止めよう。なお、筆者はエヴァのアニメ本は一切読んだことが無く、テレビ版も見ておらず、あくまでも今回完結だという劇場版の序、破、Qの流れしか知らない。完結だというのであれば、むしろこの流れで語るしかないのだ。果たして、物語として完結しているのだろうか？

★感想

物語の言いたいことは、前半にあった。ニアサードインパクト後の第3村での、かつては知らない者同士だった人たちによる、衣食住の根源たる農業を中心とした共同生活。トウジの妻ヒカリの「今を一生懸命生きる」ということ。そして、共同体での体験を通して、人間らしさを覚醒していく仮称アヤナミ。この共同体では名前が必要、ということで、アヤナミはシンジに名付けてもらったものの、結局はその共同体の世界に生きることはできず、LCL化してしまう。これこ

そ、この物語の核心と見た。だからこそ、この前半部分が作品中で半分ほどを占めてしまうのだ。ファンの中には、何故こんな場面が長々と？と感じた人も多いだろう。エヴァらしくない、と。

アヤナミはあくまでも、ゲンドウが己のエゴのために作り上げた人造人間、つまり、虚構。虚構が現実世界に生きることはできない。そして、現実世界に於ける名、名に付いたエゴを取ることこそ、後からゲンドウが言う格差や差別の無い社会の実現となる。後にミドリがゲンドウと対峙し、彼の意図を聞いて「エゴだ！」と言いつつ放ったのはそういうことなのだ。

監督が意識したにしろしないにしろ、理想世界に於ける名の意味が現れていた。そういう点では、ある意味、これに続く闘いの場面など不要なのだ。

父と息子のエヴァ対決では、茶の間や寝室、映画の撮影所などが現れた。マイナス宇宙という設定だからなのだが、マイナス宇宙とは虚構の世界。つまり、監督が描き、ファンからも非難されてもがいてきたエヴァは、単なるロボットフィギュア的なものに過ぎないということ。そういう「お遊び」はもうこれでお仕舞い、ということ。虚構の世界に浸ることはもう止めて、いい加減、現実世界に戻ろうということ。

監督が最後に望んだのは、地に足を着けた、自然に溢れた共同体の日常。だから、虚構の宇宙が崩れた後、最初の場面で登場した、第3村の自然の情景が回帰する。それは、カヲルが「円環だ」と言っていたことに呼応するが、単なる円環に非ず。元の位置に戻ったように見えるものの、出発点から様々なことを通じて学んだ末なので、螺旋的に上昇しているのだ。

そして、虚構の世界から戻ったシンジは大人になり、大きな乳のマリと一緒にいる。「大きな乳」とは、シンジの母ユイと友人だったマリにユイの母性を投影しているからだ。マリは新たなキャラとして、今回の序から続く劇場版では正体不明として登場させ、幼いシンジを抱くユイとの写真でヒントを出すだけ。監督にとって、LGBTを強調することなど、どうでもよくなったのだ。そして、「イスカリオテのマリ」などという名称も、どうでも良いこと。最後の駅の場面では、どう見ても、豊満な肉体でシンジを誘っている色気ムンムンの女性なのだ。

駅では、カヲルとアヤナミレイの姿も。彼らはもはや、エヴァや使徒など存在しない現実世界を生きているのだ。ゲンドウも本来、ここに登場しても良いはずだが、人間性を捨ててしまったので、戻れない、。人造人間なのに人間性を獲得していったアヤナミとは、対極を成す。

最後は、アニメとしては禁じ手の、現実世界の写実となった。監督の故郷の実

写。第3村の風景から監督の故郷の実写へ。人から指示されたり、押しつけられた「べき論」で生きるのではなく、自分にしかできないこと、自分の意思を大事にすること。各自がそれを尊重し合っている村の描写、それが真っ先に第3村で示されていた。真っ先に出して、「俺の言いたいことを汲み取ってくれよ！」と。そして、最後に再び回帰させ、現実の実写と合わせてのダメ押しなのだ。

監督自身の“孤独で居場所の無い感覚”という人生は、ゲンドウ、シンジ、アヤナミ、アスカに投影されているのだが、それももうお仕舞。アニメという虚構の世界から現実の世界へ。ケジメを付けた、と言うよりも、何か吹っ切れた、とでも言うべきか？60歳を、還暦という人生の円環を超えた監督の、ある種の悟りなのかも。

さようなら、すべてのエヴァンゲリオン！

★ちよっぴり考察

謎解きでは無い、ちよつとした考察を。エヴァはエゴの物語。それは、監督のエゴでもある。エゴの究極が、己の目的のためには他人をすべて犠牲にすること。それを、作品では神の計画などと。

人類の肉体的ATフィールドを無くし、魂だけの感覚の世界ですべてが一つになる世界。その世界に格差や差別など無い。それが人類補完計画。

しかし、現実世界に於いて肉体を無くすことは、すなわち死。実は、死すること無く、意識をちよいと変えるだけで、そのような世界の達成は可能なのだ。それは、「和多志」の精神と「真名井」の真理だ！（以下、詳細は<スミルノフ物理学><籠神社と真名井神社>参照のこと。）

スミルノフ物理学に依れば、すべての生命エネルギーは創造主のエネルギー分霊であり、それらすべての分霊が唯一の創造主を構成している。これは、多くの志が和して宇宙となっているという、「和多志」の精神だ。あなたはワタシ、ワタシはあなた、である。この「和多志」は、日本総鎮守たる四国の大山祇神社に「和多志大神」として祀られている。これを認識することにより、魂として創造主と一体化することができる。まさに、ゲンドウが目指した世界そのものだ。

“真”は人が逆立ちした象形で、無限のエネルギー体である創造主が本質＝主体で人類が住む物質宇宙が客体なのに、多くの人類は物質宇宙こそが本質で、見えない世界など無いと考えている。これが“逆立ち”の意味だ。人類の住む物質宇宙は、スミルノフ物理学に依れば4次元のクラインの壺であり、創造主から無限の負のエネルギー（比誘電率、比透磁率が1より小さい）がS極磁気単極エネルギーとして注ぎ込まれ、それが内部に湧き出している井戸のような状態で

ある。このエネルギーを東洋では龍と言う。そして、物質宇宙では生命体を含めた様々なものを識別するために、名を付ける。つまり、**宇宙の物理的状态を表しているのが「眞名井」**である。この「眞名井」は神話にも登場するが、弥生時代の邪馬台国王家の血統、海部氏が祀る丹後の籠神社の奥宮「眞名井神社」として祀られている。

すなわち、「和多志」と「眞名井」によって、**創造主と生命体の関係及び宇宙の物理的状态を表しているのだ。**



こういったことは、既に縄文時代に理解され達成されていた。誰かが誰かを支配するのでは無く、互いを認め支え合う共同体社会が。

ところが、定置的な穀物栽培が始まると、所有の概念が生まれた。「あなたはワタシ、ワタシはあなた」から「俺の物は俺の物、お前の物も俺の物」というようになり、それが悪い方向に発達して人が人を虐げるようになったのである。いわゆる**エゴ**である。これこそが、**人類が解決すべき問題の本質**なのだ。

エヴァではゲンドウの勝手な人類補完計画、シンジの自己中な行動がエゴそのものだ。それが、作品中では最後の作品で現実世界に戻り、各自がそれぞれを尊重し合う第3村の描写で解決されている。仮称アヤナミが名を求められたのに付けられず、最後に消えてしまったのは、この世は名が無ければ生きていけないからなのだ。**名とは、現実世界を生きるためのものでもある。**

その典型例が、約800年前のローマ皇帝フリードリッヒ2世の実験だ。新生児50人を隔離してミルクを与え、入浴させ、排泄の処理など生きるための世話はするが、声掛けなどスキンシップは一切取ってはいけないという実験。

<https://kazumadesign.com/%E3%83%95%E3%83%AA%E3%83%BC%E3%83%89%E3%83%A%E3%83%83%E3%83%92-2%E4%B8%96%E3%81%AE%E5%AE%9F%E9%A8%93/>

結果、新生児は皆、死んでしまったのだ。この結果から「言葉とスキンシップが命を育む」などと結論付けられているのだが、その本質は実はこうである。声掛けなどスキンシップする時には、まず「〇〇ちゃん」などと名を呼んで声を掛ける。名を付け、その名を呼びかけることにより、創造主の分霊エネルギーが体内に定着し、自己を形成していくのだ。それができないと、分霊エネルギーは物質宇宙の器である肉体から離れてしまうのだ。

では、このようなエゴが溢れる現実世界を変えるためには、どうしたら良いのか？和多志の精神を理解し、単なる識別の符号だった“名”に付いたエゴを手放せば良いだけだ！名に付いたエゴ=余計な所有を止め、分かち合うのだ！！

しかし、これが理解されていた縄文の世界に戻るだけではただの円環であり、退化でもある。黄金分割により収縮し、エントロピーが減少して進化が義務付けられているこの宇宙（物質宇宙ではエントロピー増加だが無限の負のエネルギーである創造主も含めた全宇宙ではエントロピー減少）では、科学技術や文化を発展させた上で、意識は縄文にシフトさせる必要があるのだ。それにより、人類は物理的爆発的なインパクトなど無くとも、新たな進化のステージに上昇する！そのための贅（にえ）など、必要無いのだ。贅を必要とするのは、サタンなのだから。

エゴを止め、分かち合う。自分が努力して、あるいはラッキーな運に巡り会って得たと**思わされている**富を平等に分配する。人はそれぞれ創造主の分霊だが、皆同じではなく、それぞれ個性があり、能力も異なる。それぞれの能力を提供し、結果を分かち合うのだ。

自分は能力があるけど、アイツは能力が無い、努力もしないしょーもない奴だ！なんて言えるのか？その“自分の能力”はどうやって開花したのだ？育った環境なのだ。家庭環境然り、周囲の環境然り。どれほど能力があろうとも、親から虐待されれば、心が歪んでグレてしまうのも当然。貧しい国に生まれてしまったら、ほぼ一生、貧しいまま搾取される生活となる。誰しも個性的な能力があるが、生まれ落ちた環境に左右されてしまうのだ。だからこそ、進学環境にしろ運にしろ、**恵まれた環境にある者は、それを社会に還元する義務がある。それがこの宇宙の法則なのだ。それに逆らうと、社会が歪み、最後は崩壊となる！**

社会に於けるいろいろな地位や名誉などと言うものは、**単なる役割の違い**に過ぎない。そこに“所有=エゴ”－現在の人類社会では主にカネなのだが－が絡むから、誰かが誰かを虐げることとなるのだ。そして、いろいろな役割はそれぞれに必要なものだから、**各役割に上だの下だのという違いは無く、平等**なのだ。オーケストラを例にすると、様々な弦楽器、管楽器、打楽器が集まって一つの音

楽を創り上げる。華やかに聞こえるヴァイオリンやトランペットなどだけでは、音楽は奏でられない。リズムを刻み内声を支えるヴィオラ（今上陛下が演奏される楽器！）や低音を支えるコントラバス、ファゴットなど、無くてはならない。そして、各団員がそれぞれの音を聴き、自分の音を合わせることによって、ようやく一つの素晴らしい音楽となるのだ。指揮者が偉いわけでもない。指揮者はちょっとした解釈を与え、バランスを整える役割だ。作曲家は、創造主の中にある音楽を受け止め、楽譜に起こす役割。

このような意識改革が成されれば、自分の居場所をわざわざ探す必要は無くなり、あなたはただそこに居るだけでいい、そういう社会になる。

★おまけの『鬼滅』

同じような大ブームとなっているアニメが『鬼滅の刃』。ここではストーリーの解説はしないが、せっかくなので、鬼について述べよう。

歴史的に鬼とは、中央から追いやられた者たちである。権力の座から遠ざけられた者たち。民話などでは、中央から退治されるべき哀しき存在である。有名な大江山の酒呑童子などは、丹後の勢力が鬼とされているのだ。

怨霊もまた、鬼とされる。怨みをもって亡くなった者たち。日本では、鬼を神として祀ることにより、強大な守護神とする風習がある。崇徳天皇や平将門公などがその例である。上述の鬼と併せて、“鬼”の上の点、つまり、角（つの）を取った字を書いて「かみ」と読ませるのも、元々が身分のある者たちだからだ。和歌山の熊野大社の一族、クカミ一族は便宜的に“九鬼”と書くが、本来の字は角の無い鬼の字である。

もう一つの鬼とは、これが最も重要なのだが、**心の闇**だ。誰もが持つ心の闇。鬼の頭領である鬼舞辻無惨は鬼殺隊の頭領である産屋敷耀哉と同じ一族、と言うか、耀哉は無惨一族の子孫にあたるわけだが、光の輝きを暗示する“耀哉＝かがや”という名で、鬼の闇と対峙させている。

鬼殺隊のほとんどのメンバーは、鬼は退治されるべき存在だと考える。しかし、胡蝶カナエと竈門炭治郎は両親を鬼に殺されているのに、鬼を恨まない気持ちを持っている。鬼は元々人間であり、鬼になる、鬼にされた理由があるわけで、そのため、鬼は救うべき存在で、自分たちと何ら変わりはないとして、差別することがない。

復讐からは復讐の連鎖しか生まない。鬼は日光に弱く、（無惨を除いて）日輪刀で成敗される。これは、光によって闇が消えることを意味する。だから、鬼の

心にも光を当てて救うことができるのだ。

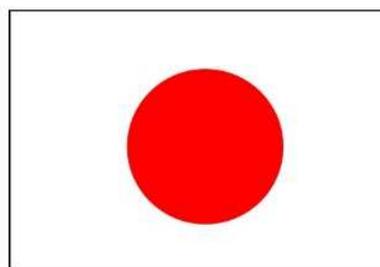
しかし、太陽の光が当たっても必ず影＝陰ができる。光有れば闇有り。これでは、闇を無くすことはできない。唯一可能なのが、創造主の光だ。創造主の本質は無限の負のエネルギーである。これを日本では、**豊受大神**と言う。このエネルギーから絶えず発せられている光は全方位を照らし、故に陰ができない。この光のエネルギーを日本では、**天照大神**と言う。そして、両者一体となって**創造主＝天御中主神**を形成する。遍く照らす創造主の光は闇を消す有難いものだから「おかげ様」とも言い、別名・天御蔭神（アメノミカゲノカミ）とも言う。

すなわち、**心の闇を消すには、精神的に創造主と一体となることが必要で、それには前述のように、「和多志」の精神と「真名井」の真理を理解し、実践すれば良いだけなのだ！**

陰陽で言うならば、豊受大神は負のエネルギーだから陰、天照大神は光だから陽。天御中主神は両者一体、陰陽の合一。数字で言えば陰は偶数、陽は奇数で、図形ならば、最小の陰の図形は四角、陽の図形は丸。色で言うならば、白が陰、赤が陽。すなわち、**白地に赤丸の日の丸は、豊受大神、天照大神、そして両者一体となった天御中主神を意味する！**だから、炭治郎の耳飾りはヒノカミ神楽の継承者としての証である日輪で、日輪刀でも消されない無惨がかつて自分の頸を斬り落とされそうになったことがある剣士の耳飾りと同じものなのだ。ヒノカミとは、根源の天照大神＝天御蔭神に他ならず、無惨はこの光によってようやく消え去るのだ。（他の鬼たちは、太陽神としての天照大神で十分消え去る。）



<https://mediajockjp.com/2020/11/07/post-4071/>



さて、実際に鬼を祓う儀式と言えば節分だが、節分の発祥とされる京都の吉田神社（だけとは限らないが）では、黄金4つ目の方相氏が赤、青、黄の鬼たちを追い払う。詳細は<節分ー追儺（ついな）ー>を参照頂くこととして、重要部分を抜粋する。

方相氏



<http://www.linkclub.or.jp/~uno/A604yt-yoshidatsuina.htm>



<http://kotohurari.web.fc2.com/event/02yosi01.html>

- 1つ目

この物質宇宙や生命体が現れる前の創造主そのもの。神道に於ける一つ巴。

- 2つ目

プラスの陽子とマイナスの電子（と中性子）から成る陰陽拮抗状態の物質宇宙。神道に於ける二つ巴。

- 3つ目

神道に於ける三つ巴で、陰陽の拮抗状態から脱し、螺旋的に上昇あるいは下降する。上昇は進化・発展だが、下降は退化である。「生命の樹」に於ける上昇か、それを鏡像反転した「死の樹」に於ける下降状態の暗示。

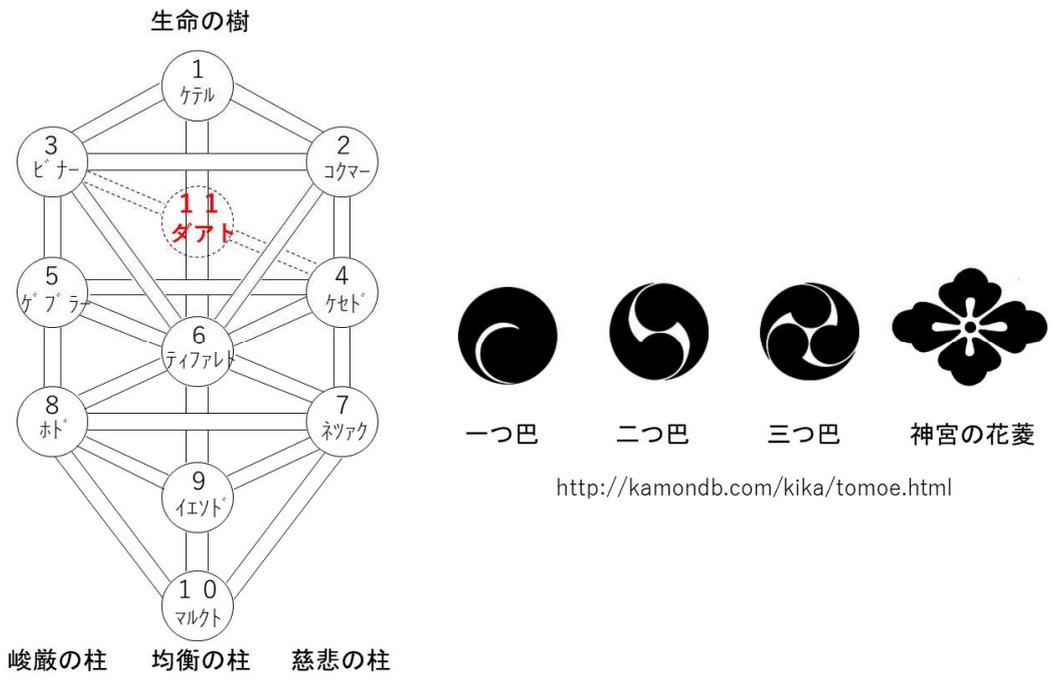
- 4つ目

真理を悟り、創造主と一体化した状態。この状態に至るには、すべての存在が創造主の一部であり、それが創造主全体を構成しているという「和多志」の精神をすべての高等生命体（＝人類）が持ち、宇宙の構造である「眞名井」の真理を理解することが不可欠。神道に於ける花菱で神宮の御紋。

- 赤鬼、青鬼、黄鬼

色の三原色で、混合すると黒になるから、闇の邪気の象徴。

すなわち、黄金4つ目で鬼を追い祓う方相氏は、**創造主の光=天照大神・天御**
蔭神の光=黄金の輝きでもってすべての闇を祓う=包み込むことの暗示である。



奇しくも、大ヒットアニメは共に「和多志」の精神と「真名井」の真理を理解
 することに帰着した。**心の闇=エゴを祓い、新たな時代の幕開けへ！**